

# 令和7年度 全国学力・学習状況調査の結果について

## I 調査結果

【国語科】 本校の国語科における正答率は、県・全国平均を下回る結果となりました。

○目的や意図に応じて、資料を分類したり、関係付けたりして、正答を導く問題や、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付ける問題がよくできています。

△「知識・技能」の漢字の活用や語彙理解に課題があります。

△「思考・判断・表現」の文章構造を捉える力や理由を述べる力に弱さが見られます。

△問題形式別にみると、記述式では無答率が高く、複数の資料を基に理由を書く問題で特に顕著でした。

【算数科】 本校の算数科における平均正答率は、県・全国と比較し、上回っています。

○「数と計算」の正答率は全国平均を上回りました。分数の計算や小数の加法など、基本的な演算技能も比較的身に付いていると言えます。

○図形領域でも、平行四辺形の性質を基にした作図や角度に関する問題で高い正答率が見られ、基礎的な図形の性質を理解し、活用できていることが分かります。

△分数や小数に関する問題では、計算手順を説明する課題が残りました。数直線を用いた分数表現や、複雑な通分を含む計算の説明において、無答率が20%を超える問題もありました。

【理科】 本校の理科における正答率は、県・全国平均をやや下回る結果となりました。

○領域別にみると、「生命」領域は県・全国平均を上回り、比較的良好な結果となりました。

△「エネルギー」を柱とする領域では県・全国平均を下回っており、特に課題が大きくなりました。

△発芽実験から新たな問題を考える記述問題や、水の温まり方について、実験のまとめに必要なことを書く問題等で無答率が高い結果となりました。観察結果をもとに考察を言語化する力に課題があります。

## 【質問紙】

本校の児童は、学校生活全体に対して前向きに取り組もうとする姿勢が見られます。授業に対して「分かりたい」「できるようになりたい」という意識をもって参加している児童が多く、学習に向かう基本的な態度が概ね身に付いている様子が伺えます。また、友達との関わりの中で協力したり、助け合ったりしようとする意識も

一定程度見られ、学級や学校生活を大切にしようとする気持ちが育っていると言えます。

さらに、学校のきまりを守ろうとする意識や、教師の話を聞いて行動しようとする態度が身に付いており、落ち着いた学習環境が形成されている点も本校児童の強みです。こうした基盤があることは、今後、主体的・対話的で深い学びを進めていく上で大きな土台となると考えます。

一方で、学習において自分の考えや取組を振り返り、次の学習につなげる力については、十分とは言えない面が見られます。課題に対して取り組むことはできているものの、「なぜそう考えたのか」「どのように工夫したのか」といった学びの過程を、言葉で説明する力に課題があります。

また、分からぬことや難しさを感じた場面で、自ら学習方法を工夫したり、周囲に相談したりするなど、学びを調整する力に伸びしろがあります。家庭学習では、量の確保だけでなく、学習内容や方法を自分で意識して取り組む姿勢をさらに育てていく必要があります。

## 2 改善策等

国語科では、漢字や語彙の定着を図るとともに、文章構造の理解力を身に付ける必要があります。具体的には、ちらしやポスターなど身の回りにあるものを題材に、情報の整理順序や工夫を見つける学習を取り入れることに取り組みます。また、記述力向上に向けては、「資料から根拠を選び、考えを結び付け、まとめる」という三段階の指導を徹底し、字数の制限を意識した練習を行います。さらに、無答率の高さに対応するため、ペアやグループでの口頭活動を通して「まず書く」習慣を身に付けさせるように意識していきます。

算数科では、全体として成果は見られる一方、数直線を用いた分数表現や、複雑な通分を含む計算の説明において無答率が高く、20%を超える問題もありました。このことから、今後は計算の意味を言葉で表す活動や、考え方を図や言葉で説明する指導に力を入れていく必要があります。また、データの活用においても、理由を言語化する記述式問題において十分な対応ができなかったことから、説明力を育成する学習活動を充実させたいと思います。

理科では、今後は、観察や実験結果を根拠にした考察活動を強化する必要があると考えます。結果を見て「なぜそうなるのか」を言葉にする時間を確保し、グループで意見を共有した後に文章でまとめる活動を取り入れていきたいと思います。また、「○○だから△△である」という根拠を示すことで、段階的に自力で書けるようにする支援をしていきます。さらに、エネルギー領域に関しては、電磁石や回路に関する実体験を充実させ、手を動かしながら操作と性質の関係を理解させることが重要だと考えます。記述問題に対しては、解答の一部でもよいので書かせる工夫を行い、「書けた」という経験を積み重ねることで無答率を減らすことができるようになります。